

北アフリカにおける古代末期の地誌表現

—— ハイドラの舗床モザイク《地中海の都市と島々》の創意をめぐって

瀧本 みわ (東京藝術大学)

1995年、チュニジア中西部のハイドラで発見された世俗舗床モザイク《地中海の都市と島々》は、古代末期の地誌表現の諸相を示す貴重な作例であり、北アフリカのローマ属州美術として独自の性格を持つものである。本作品（約5.5m×5m）に表されるのは、魚介類モチーフで縁取られた青緑の大海に、古代地中海世界の都市と島を15の浮島として略図的に示した地誌的あるいは地形図的な風景である。発掘調査報告（Béjaoui, 1997）によれば、制作年代は暫定的に3世紀末から4世紀初頭に帰属される。主題に関して、ベジャウィは古文獻に依拠しながら、本作品に描かれた都市と島をウェヌス信仰所縁の地と見なし、最終的に3-4世紀の北アフリカで人気を博した「海のウェヌス」図像の文脈から解釈している。しかし、ここにはウェヌスが不在であるばかりか、物語的要素も神話的モチーフも稀薄であり、その造形的特質はウェヌス図像の伝統からは説明することができない。むしろ、一種の「聖地巡礼図」の趣を持つ本作品を、ウェヌスにまつわるトポスを象徴的に図式化した理想的風景図と捉えるならば、地誌的図像の文脈に組み込むことができよう。この観点から考察すると、本作品には古代末期の複数の風景タイプが混在している。本発表では、地図的でありながら風景的な地誌表現に着目し、その特異な図像編成の過程を検討することにした。

各々の浮島は平面的にデザインされ、鳥瞰視された神殿や港の建築モチーフ、山や葡萄畑などの風景モチーフによって構成された無人の都市図として表されている。島々には、ラテン語の銘によって地名が補足されており、それ故にローマ帝国の官職便覧《ノティティア・ディグニタートゥム》にみられるような、古代末期の世俗実用写本等の都市表現を翻案したものと考えられる。しかし、建築表現によって諸地域の個性化が行われようとも、本作品は地理的状况を反映した地形図ではない。そこには、魚介が棲み、プッティが戯れる情緒的な理想風景が創出されている。

本作品に内包される様々な地誌表現は、北アフリカ特有の風景レパートリーから指摘できる。すなわち、地中海世界で広く愛好された「ナイル河風景」とそこから派生した「漁獵風景」にみられる海の風物的描写、そして、背景描写として建築モチーフが配される「港湾風景」や、所領地や邸宅の建築表現が情景の中心的要素へと移行する「ラティフンディア・サイクル」である。本作品は、古代末期の慣習的な風景表現を用いながらも、それらを象徴的モチーフとして観念上の世界観を図式的に表象したものではないだろうか。

本発表は、初期キリスト教時代の海や河に囲まれた「聖蹟図」から、中世の「世界地図(マッパ・ムンディ)」へと至るキリスト教世界のカルトグラフィの成立に寄与した古代末期の遺例として本作品を位置づけるものである。